

## 歌十三首：文苑

著者	?板，勝美，下村，光，下村，成典，下山，陸治
雑誌名	龍南會雜誌
巻	1 1
ページ	4 0 - 4 1
発行年	1892-11-30
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/3950">http://hdl.handle.net/2298/3950</a>

學窓月

硯友會員 黑板勝美

小夜ふりてふみ讀む窓に照りまさる月のかつらをいつか折ふまし

同

同 下村光

小夜ふけてふみ讀みをれは淋しさを諫め顔なる窓の月影

城山懷古

同 下村成典

城山の木こる翁にことゝはん十年の秋の昔かたりを

旅中月

照る月はいつこの秋もかわらぬなほ故郷の月を戀しき

露如玉

同 下村光

秋の野に玉かど見ゆる白露は人まつ虫の涙なるらん

雨中虫

かきくらしふる秋雨にあさちふの虫の音さへもうちしめりけり

月如鏡

秋の夜のちりもくもらぬ月影は天つをとめけ鏡あるらん

同縣親睦會

故郷は八重の海山へたつをどへたてぬ友そうをしかりける

學窓月

同 黑板勝美

雲路に迷ふ初かりの

夢おどろかすさ夜中に

學びの窓の月見れば

わが行く末ぞ思はるゝ

草花 二首

下山陸治

八千草の花さく頃はあきの野の野分きの風のさはかすもか那  
百草の花のいろくさきみたれ春見し野邊のねなしみどりも

野鹿 二首

全

尾花ちるまろのゝ原の夕かせに妻こふ鹿の聲そみゑむ  
秋萩のちりしく野邊の露わけて鳴ねかなしきつまこひの鹿

## 雜報

### ○天長地久

紫雲の靉靆かるは太平の氣か群鳥天に舞ふと治世の象か四海浪靜か

に風枝をを鳴らさず仰げば則はち山高く木緑りに俯せば則はち川長く水清し稔なく莠なく八十  
五國八百四郡咸く 陛下の聖明を仰ぐ文化日に開け國力月に盛なり今より三十餘年前 陛

下降臨の當時にありて誰か今日の太平を想はんや思ふて茲に至れば誰か 陛下の盛徳に感泣  
せるものを吾人多幸盛世に生れ恩澤を浴し此祝節に遇ふを得感喜何ぞ窮すらん乃はち尊影を  
拜し大赦を誦し大盃を引ひて滿飲し遙かに東天を拜して呼で曰く聖文睿武蕩々赫々寶祚万歳万